
RISE&SHINE

ロリコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R I S E & a m p · S H I N E

【Nコード】

N 7 7 0 5 S

【作者名】

ロリコン

【あらすじ】

ピカピカ光る女の子の話。

太陽の民！

世界は数多のエリアに分かれている！

太陽の民はエリアに光と熱を与える人たち！

人たちってどうか、人じゃない！ 人と同じ背格好をしてるけど、人とは全く異なっただ性質を持っている！

まず見た目がスゴい！ すごくカツコイないしカワイイ！ カッコカワイくない太陽の民なんて1人もいない！ 数兆年以上前、時の超イケメン皇帝、太陽神様が、同族のブサメンや喪女たちを根絶やしにしたのだ！ 遺伝子も残らないほど念入りに！ だから現代の太陽の民は美男美女ばかり！ 美形ぞろいで目眩がおこる！

とってもまぶしいの！ だから太陽の民って呼ぶんだっていう人もいる！ そんなのどうだっていい！ もっと重要なことがある！

太陽の民も他の種族と同様に、異種族間生殖が可能ってこと！

つまりみんなとセックスが可能！ 太陽の民とメチャクチャセックスが可能ってこと！ 太陽の民はメチャクチャセックスが巧い！

そのうえ美形ぞろい！ それでいてメチャクチャセックスが巧い！

太陽の民の美しさは外見やおいや味だけじゃなくて、精神的に他種族を浸食する！ 魂に訴えかけて洗脳をしかけてくる！ それより、なによりメチャクチャセックスが巧い！

そして太陽の民はすごく光る！ ピッカーピッカーで四六時中光って、熱を出している！ まぶしくてあたたかくて、冬場はすごい人気！ 行列ができる！ 逆に夏場はうざがられる！ でもエリアに暮らす人々が、作物を作ったり洗濯物を乾かしたりするには必要不可欠！ 絶対大事！ それに夏は暑くないとビールが美味しく飲めない！ 夏期における太陽の民の存在意義の八割は、みんなにビールを美味しく飲んでもらうため！ 残りの二割はお湯でさっと湯

がいて白髪ネギと一緒にポン酢で和えることでビールつまみになる！ サッポロビールとすごく馴染む！ つまり夏場の太陽の民の存在意義の十割はビールのため！ 社会的な地位がアルコールより下の種族！ かわいそう！

太陽の民のホームエリアはオリーブランド。

オリーブランドは全てのエリアと行き来ができる。別エリアへ移動の際には、エリア転送魔法陣を使う。往来の多いエリアへの魔法陣は、公共の場所でも解放されている。体の一部を魔法陣に接触させ、エリア移動を願うだけで、魔法陣に対応したエリアへ、身体と魂が一瞬で転送される。

往来の少ないエリアへのアクセスには、駅と呼ばれる公共施設を利用する。駅には、1ページごとに、各エリアに対応した魔法陣を記録した書物が保管され、管理されている。駅の司書にお問い合わせすると、行きたいエリアの魔法陣を記録した書物を持ってきてくれる。

駅は塔の造りで、地上からは頂上を窺うことができなほど高い。頭頂部分は、気が遠くなるほど昔から今まで、ずっと増築され続けている。毎夜ごとに増えるエリアの魔法陣を記録した書物を納める棚を作るため、塔の増築は続いている。

太陽の民は、オリーブランド以外のエリアに少なくとも1人存在する。太陽の民はエリアにおける太陽の役割を担っている。

新しいエリアが出来ると、まず始めに太陽の民が派遣される。エリアの大まかな地形は太陽の民によって決定される。続いて、マリアナランドから亀が派遣される。亀は口から大量の水を吐き出して、エリアに大きな水たまりを作る。亀が役目を終えたあと、数億羽のペリカンが、下顎にぶらさがる袋に大量の土砂を詰めてやってくる。ペリカンは亀の作った水たまりの上に土砂を撒き、陸地を作る。土砂と水分が混じり合うと、土砂に含まれている草木の根や種が芽を吹き出し、森や草原が生まれる。それが終わってからやっと、様々な種族で構成される入植者たちがエリアに転送されてくるのだ。

太陽の民は人間でいう13歳くらいになると、故郷であるオリーブランドを離れ、1年間を別エリアで過ごす。将来、自分のエリアを持つための、いわば修行である。

この度、ムプリユクは従姉妹にあたるメソリリユスの管理するエリアへと旅立つ。メソリリユスの下で、太陽の民として自立するための教育を受けるのだ。

ムプリユクとその両親の3人は、駅へとやってきた。

「ええつと、『サリサリニヤーマ』のページは、と……」

目の前では、ムプリユクの半身ほどもある大きな書物が机上に広げられていて、よいしょよいしょとたいそうな掛け声と共に、司書がページをめくっている。ムプリユクは胸に手を置いて、メソリリユスの待つエリア『サリサリニヤーマ』の魔法陣が表れるのを、期待と不安が混ぜこぜのドキドキで待っている。

「緊張しなくても大丈夫だよ、ムプリユク。そんなに怖い顔をしていては、メソリリユスに心配をかけてしまうぞ」

大きな手のひらでムプリユクの頭を撫でるのは、ムプリユクのお父さん。端正な目鼻立ちに、くつきりとした顎のライン。くせつ毛の金髪は肩まで伸びている。白を基調とした詰襟の正装^{ごし}にも、無駄な贅肉のないシャープな体格がうかがえる。振り返ったムプリユクは、自分の2倍ほどありそうな背の高いおとうさんの顔を見上げる。と、おとうさんにはっこりと優しく笑った。おとうさんは笑うとえくぼができる。娘のムプリユクから見ても、とても可愛らしい。

「おとうさんの言つとおりよ。笑顔、笑顔！ 太陽の民は、いつだって笑顔でいなくっちゃ。あらあらムプリユク、ほおっぺたが力チコチよ」

ムプリユクの前に屈みこみ、温かい指先でムプリユクの頬をグルグルと撫でるのは、ムプリユクのおかあさん。長い睫毛の潤んだ瞳に、高く尖った形の良い鼻先。桃色の唇が微笑んでいる。耳に掛からないほど短くした金髪が、駅の窓から差し込む太陽神の後光を反射して、キラキラとまばゆい。ゆったりとした正装のローブ越しにも、柔らかな手足の曲線が見て取れる。おかあさんは、笑うとかたえくぼができる。娘のムプリユクから見ても、とても可愛らしい。

ムプリユクは両親の気遣いに、丸くてくりくりした桃色の瞳を、ぐるぐると回した。

太陽の民が、自分の子どもを修行のために別エリアへ送り出すとき、正装をする習慣はない。にも関わらずムプリユクの両親は、まるで冠婚葬祭の時のような、真心のある礼服の着こなしである。このあたりに、彼らが娘のムプリユクに対して深い愛情を抱き、誇らしさを感じていることが垣間見える。

おかあさんに頬をむにゃむにゃと揉みほぐされたおかげで、ムプリユクの表情に柔らかい笑顔が戻った。

ムプリユクはぴよこんと飛び上がり、両親の前で元気な声を上げた。

「おとうさん、おかあさん！ わたしは大丈夫！ きつと、サリサリニヤーマのみんなと仲良くなるわ！ 仲良くなって、それで、いろんなことをたくさん教えてもらって、ちゃんと忘れずに憶えて、立派な太陽になれるように、頑張る！」

ムプリユクの言葉に、おとうさんとおかあさんは、明るくて、活気づいたひまわりみたいな笑顔を返した。

「ムプリユク、僕たちは君がきつとやり遂げることができるって、信じているよ」

おとうさんは再びムプリユクの頭を優しく撫でた。おかあさんは目尻に浮かんだキラキラしたものを、指で拭いたりしながら、嬉しそうに微笑んだ。

「ムプリユクさん、サリサリニヤーマへの転送準備が出来ましたよ」

ムプリユクが振り返ると、机の上に置かれた書物が、あるページが見開きにされている。司書はムプリユクと、彼女の両親の顔を交互に眺め、にこやかになる。

「短い期間ではありませんが、ご両親とはしばしのお別れです。挨拶はお済みですか？」

「はい！ 大丈夫です！」

ムプリユクは旅行かばんを手に取り、両親の元から5メートルほど離れた机の前まで歩み寄った。司書が魔法陣を示す。

「さあ、魔法陣を片手で触れて、想うのです！」

ムプリユクは片手を魔法陣の上に乗せると、おとうさんと一緒に練習した時のように、自分がエリア・サリサリニャーマまで飛んでいくイメージを、頭の中に思い浮かべた。すると、みるみるうちにムプリユクの全身が緑色に輝きはじめる。数秒と経たないうちに、ムプリユクの身体は緑色の光に包まれる。光はパチツと弾け、無数の小さな光球に変わり、魔法陣に吸い込まれていった。

エリア・サリサリニヤーマを構成するのは、たった一つの島である。東西に長い楕円形で、島の北西と北東に一箇所ずつ、三角形の半島がぴよこんと飛び出している。エリア・サリサリニヤーマの俯瞰図を描くと、猫の頭部のような造りをしているのが分かる。

島の外には海が広がっている。果てはない。海は外エリアにあたり、サリサリニヤーマの統治者であるメソリリュスの力の及ばない場所である。サリサリニヤーマに隣接する海を統治するのは、太陽神の遠縁にあたる男の娘で、なんかすごくかわいい。なんか、すごくかわいい。かわいい。すごく。男の娘は、たまにサリサリニヤーマへ遊びに来る。名前はイサラキネプト。愛称はイサキちゃん。イサキちゃんの背中には、三本の黄色いストライプ模様がある。成長すると、きれいなストライプ模様はなくなってしまふ。イサキちゃんは、笑うとすごくかわいい。笑わなくても、もちろんかわいい。

サリサリニヤーマの島の名称はチリソース。統治者であるメソリリュスが、亀の吐き出した水と、ペリカンの吐き出した土とが混ぜこぜになった初期の陸地の様子を見て、ふと口にした言葉が由来である。

「なんだか、チリソースみたいね」

瑞々しいトマトをふんだんに使った、具だくさんのチリソース。ほどよい酸味の効いた、食欲をそそる光景であった。

『メソリリュス様はサリサリニヤーマに入植者を迎え入れられ、それに際しての諸々の職務を終えられたしばらくの後に、サリサリニヤーマでは初めての御食事をなさいました。御存知のとおり、太陽

の民であるメソリリユス様におかれましては、御食事なさることは、生命活動に必須の栄養素を取り込むための所作ではございません。我々他種族にとっての、読書や劇や音楽といった、教養の類にあたります。

太陽の民には、全く御食事をされない方々もおられます。しかしそれでは、あまりに他種族との関わりが少のうございます。我々にとつて食べるということは、生きることと同じでございます。メソリリユス様は、サリサリニヤーマを統治されるにあたり、我々入植者たちの暮らしぶりを少しでも理解なさるうと、我々と同じものを、同じようにしてお召し上がりになることを、希望なすつたのでございます。

とはいえ、メソリリユス様は毎日御食事をされる訳ではございません。数日に一度、簡単な調理を施した御食事をお召し上がりになるだけでございます。恐縮ではございますが、太陽の民の中には、自らの統治するエリアの、全ての智慧や知識を、余さずに平らげ、自らの体内に採り込み、力に変えて、少しでも太陽神様の後光に近づこうとお考えの、恐れ多い方々もいらっしゃるという噂を耳に致します。しかし、我らのメソリリユス様におかれましては、メソリリユス様が食欲をお持ちになられることは、ただただ我ら、エリア・サリサリニヤーマに生活をする者たちを、理解しようとなさる優しいお気持ちに他なりません。メソリリユス様が御食事をされることは、まさに我々への純粋な真心の現れなのでございます」

貴方が知りうる最も肥満度の高いご家族・知人を頭に思い浮かべてください。その方に、コック服を着させてください。その方の顔に、ブタを掛け合わせてください。

それが、グッダルガンフさんです。

「メ、メ、メソリユリユス様から、お、お声を掛けて頂いたことは、ほんとうに、び、びっくりしたし、なにより、ゆ夢のようだったよ。他のエリアでは、お、お、俺みたいなの、こんなこんな、しゃ喋りも禄にできないブタ野郎は、み、み、みんな、きききにも掛けないからな。メ、メ、メソリユリユス様には、か、ど、どれ、どれだけ、か、感謝をしても、しきれないよ」

「メ、メ、メソリユリユス様が召し上がったのは、サンドイッチさ。サ、サンドイッチっても、シュリンプサンドさ。えええエビがたくさん、入ったシュリンプサンドさ」

「農場の連中から、メ、メ、メソリユリユス様のサンドイッチに使う、バ、バゲツドをつくるために、メ、メ、メソリユリユス様の祝福を受けた、小麦を、わ、分けてもらった。メ、メ、メソリユリユス様の、お、お食事を、つくるためだって、言ったら、みみみみんな喜んで、分けてくれたんだ」

「バ、バゲツドは、か、お、か、窯で、お俺が自分で造った、か、窯で焼いたんだ。あ、あんまり焼き目をい、入れないように、苦労した。苦労したんだ。だ。だって、あ、あんまり焼かなくても、メ、メ、メソリユリユス様の祝福を受けた小麦は、こうばしいんだ。す

ごく。表面は力、カリカリだけどな、ちよつと、歯が、と通りにくいと思われるんだが、違うんだな。な、中身はすごく、もっちりしてるんだ。ちよ、ちよつとかじると、は、歯を押し戻す食感が、ふつとなくなつて、すぐ、か、噛み切れるんだ。もももっちりして、ふ、ふつくらしてる。お、お、俺が前に住んでいた、アプリュシェファ様のエリアで獲れた小麦よりも、メ、メ、メソリユリス様の小麦を使ったパンのほうが、ふ、ふつくらしてて、味があるつて、お思うよ」

「バ、バゲットへ縦にきれこみを、い、いれて、そこに、ブーケレタスを敷くんだ。バ、バゲットのカリカリ食感が、チリソースを吸い込んで、ふい、ふ、フニヤペチーノに、ならないようにな。ブーケレタスは、か、か、噛むとシユワツつと瑞々しくて、とつても、あ、甘いんだ。これもメ、メ、メソリユリス様の祝福を受けてるんだ、も勿論な」

「エビは、エビは、イサキラネプト様が採ってきてくれた。わざわざ、採ってきてくれたんだ。そ、そうなんだ、そうなんだな、エビの殻が、少し、紫色になっているんだ。紫をおびて、い、いるんだな。こ、これは、本当は湯搔いたら、か、殻も頭も、残さずに食べられるんだが、こ、今回はシユリンプサンドだからな。ゆ、茹で上がったエビの殻は、ぜぜ全部剥いたよ。む、剥いた後の殻や頭は、油で素揚げにして、塩をふ、ふりかけて、あ、あ、後で俺たちのオヤツにしたんだけどな。ででも、メ、メ、メソリユリス様が厨房にやってきて、かか殻のセンベイを見つけて、目を輝かせたんでは、半分はメ、メ、メソリユリス様に、あ、あげたんだよ。とても、喜んでいらつした。す、すごく、かわいらしい笑顔だったよ」

「みてくれ！ イサキラネプト様の、エ、エビは、茹でると、身がちよつと卵色に、黄色く、な、なるんだな。ゆゆ湯で加減がちよつ

と、む、難しいんだ。エ、エ、エビの中心が、ま、まだ生のまま、の残すんだ。残すんだよ、あ、あえてな。あ、甘さが違ってくるからな。エ、エ、エビは弾力があって、すごく、クニヨクニヨしているんだ、だな。こここれが、この、弾力が、バ、バゲットの歯触りと、す、すごく合うんだ」

「ト、トマトは、残念だが、メ、メ、メソリユリユス様の祝福を受けるよりも、ささ先に収穫したものしかなかったんで、ま、まあ、来年は、来年にままた、こ今度はメ、メ、メソリユリユス様の祝福を、受けたトマトを使おうと思うよ。たたたたた太陽神様の直轄エリアで採れる、フォトン・ヴァのトマトと比べたら、ちよ、ちよつと味わいが、お、お、追いつかなかったが、それでも、メ、メ、メソリユリユス様がエ、エリア・サリサリニャーマで収穫されたものを、つ、使いなさいって、ことだったからな。で、でも、来年は、も、もつと美味しいトマトが、きっと、手に入るから、おお、俺は楽しみだよ」

「ブーケレタスの間に、エ、エビを並べて、チリソースをかけて、か、完成だ」

「お、お、俺もメ、メ、メソリユリユス様と同じ食卓によよ呼ばれて、お、俺が作ったシュリンプサンドを、メ、メ、メソリユリユス様と、あと、イサキラネプト様と、い、い、一緒に、食べ、め、召し上がったよ。あ、食べたよ。あ、あ、あの時の、メ、メ、メソリユリユス様と、イサキラネプト様の、笑顔は、おお俺が作ったお食事を、本当に、よ喜んで、召し上がってくれたんだ。お、お、俺は、それだけで、よかつたって思ったよ。お、お、俺は、本当に料理をやっていて良かったと思えたよ。お、お、俺の、こんな、お、俺の作った料理を、あ、あ、あんなに笑顔で食べてくれて。す、すごく嬉しかったん、だ。本当に、心から感謝したよ」

メソリリユスとイサラキネプトが口にした、エリア・サリサリニ
ヤマでの初めての食事は、エリア唯一の料理人であるグッダルガ
ンフさんの真心が目一杯に詰め込まれた、真っ赤に情熱的なシユリ
ンプ・チリ・サンドなのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7705s/>

RISE&SHINE

2011年10月7日12時38分発行